

NPO 法人ふくしま 30 年プロジェクト 平成31 年・令和元年(2019)度活動事業報告



福島県福島市飯坂町字一本松 11-7

活動報告

●食品・環境放射能測定

食品・環境放射能測定については、トータル測定数が 324 件となり、平成 30 年度と比較すると 11 件減とほぼ横ばいとなっています【表 1】。

測定検体の傾向としては、前年度から行っていた「生活に密着した放射能測定」事業が終了し、流通品測定事業が中心になりました。これは、『みんなのデータサイト』で行った「2019 全国たけのこ無料測定キャンペーン」も含め、流通食品に注力して測定を進めたことによります。結果として、食品が全体の 63 %と 3 分の 2 近くを占め、残り 3 分の 1 のうち、環境が 14.2 %、土壌が 22.8 %といった割合です【表 2・同グラフ】。

「流通品測定プロジェクト」については、食品のリクエストをもらって測定を進める方向で考えていたのですが、思ったほどリクエストが集まらないという結果になりました。積極的に関わってくれたのはごく少数の方のみで、原発事故から 9 年目を迎えて、市井の人々の意識が変化したことをあらためて実感した 1 年でした。

また、みんなのデータサイトからは、令和元年 10 月 12 日の台風 19 号による大雨で決壊した川からの氾濫土を測定する「台風 19 号水害被災地 土壌放射能調査」を行ないました。今年度の土壌測定は、このプロジェクトを中心に行ったことになります。こちらも氾濫土を募っていたのですが、少数の積極的な協力者が県内（いわき市、須賀川市、本宮市、二本松市）と回って採取してくれたことで形になりました。

下半期からは、伊達市の除染区分で C 地区となる地域を中心として空間放射線量と土壌測定を行なう「伊達市測定プロジェクト」を開始しましたが、季節が冬となったため出足が低調となってしまいました。「流通品測定プロジェクト」と同じく、放射能にまつわる関心の低下は如何ともしがたいといえるでしょう。春先にかけては、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の影響からコミュニケーションを取っての測定が難しく、測定数が伸び悩んでいます。

最後に、今年度も 10 月下旬にゲルマニウム半導体検出器が故障し、その修理にともなって三週間ほど測定が滞りました。

「生活に密着した放射能測定」「流通品測定プロジェクト」は『JT NPO 応援プロジェクト』の助成金を、また、「伊達市測定プロジェクト」は『『5』のつく日。JCB で復興支援』の寄附金を活用させていただきました。

【表 1】平成 31 年・令和元年度別測定件数

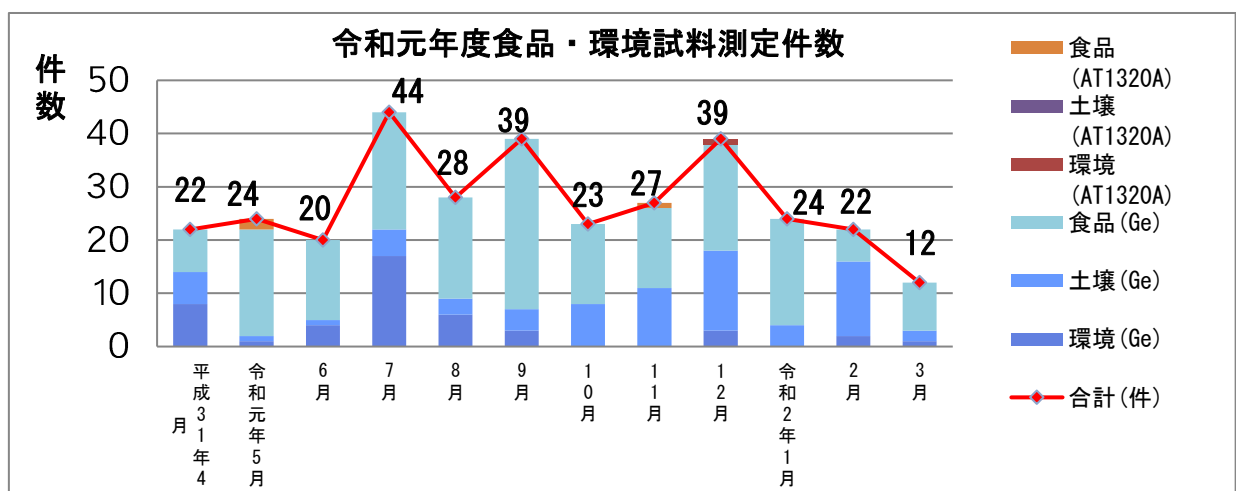
平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	平成 31 年・令和元年度
794	591	661	752	611	335	324

【表 2】平成 31 年・令和元年度食品・環境試料測定件数

	環境(Ge)	土壌(Ge)	食品(Ge)	環境 (AT1320A)	土壌 (AT1320A)	食品 (AT1320A)	合計(件)
平成 31 年 4 月	8	6	8	0	0	0	22
令和元年 5 月	1	1	20	0	0	2	24
6 月	4	1	15	0	0	0	20
7 月	17	5	22	0	0	0	44
8 月	6	3	19	0	0	0	28
9 月	3	4	32	0	0	0	39
10 月	0	8	15	0	0	0	23
11 月	0	11	15	0	0	1	27
12 月	3	15	20	1	0	0	39
令和 2 年 1 月	0	4	20	0	0	0	24
2 月	2	14	6	0	0	0	22
3 月	1	2	9	0	0	0	12
令和元年度 計	45	74	201	1	0	3	324
平成 30 年度 計	113	46	175	0	0	1	335

Ge＝ゲルマニウム半導体検出器、AT1320A ＝ 簡易食品測定器(NaI シンチレーター)

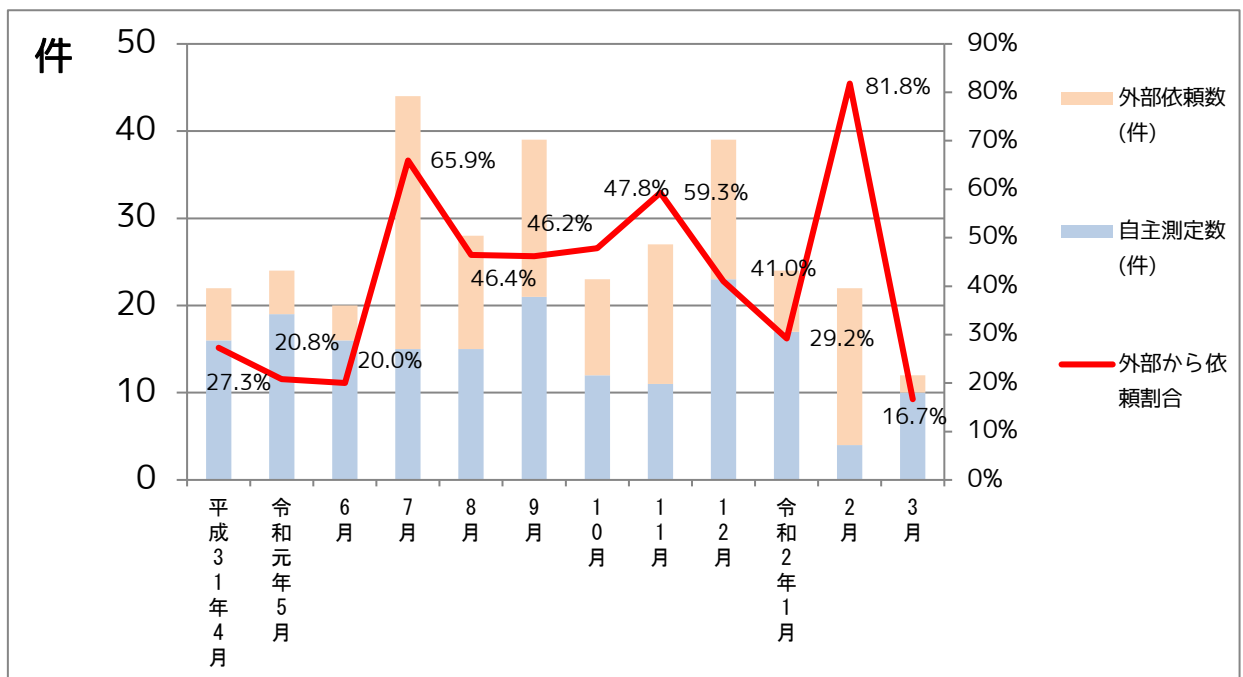
【同グラフ】平成 31 年・令和元年度食品・環境試料測定件数



【表 3】 外部からの依頼件数

	全測定数 (件)	外部依頼数 (件)	外部から依頼 割合	備考(主な依頼者)
平成 31 年 4 月	22	6	27.3 %	「賛助会員」
令和元年 5 月	24	5	20.8 %	「賛助会員」
6 月	20	4	20.0 %	「賛助会員」
7 月	44	29	65.9 %	「賛助会員」
8 月	28	13	46.4 %	「賛助会員」
9 月	39	18	46.2 %	「食品会社」「賛助会員」
10 月	23	11	47.8 %	「食品会社」「賛助会員」
11 月	27	16	59.3 %	「食品会社」「賛助会員」
12 月	39	16	41.0 %	「食品会社」「賛助会員」
令和 2 年 1 月	24	7	29.2 %	「食品会社」
2 月	22	18	81.8 %	「賛助会員」
3 月	12	2	16.7 %	「賛助会員」
合計	324	145	44.8 %	

【同グラフ】 外部からの依頼件数



●ホールボディカウンタ(WBC)測定事業

ホールボディカウンタ測定については、平成 31 年・令和元度も農業者団体の測定を中心に行いました。

1. 平成 31 年・令和元年度の WBC 測定実績

平成 31 年・令和元年度の測定総数は、のべ 19 名となっています。そのうち、15 名が定期的に測定している農業者の方々と、年齢的には 50 代以上の方がほとんどを占めています。セシウム 137 が検出された方の人数は、19 名中のうち 1 名 (5.3 %) でした。なお、セシウム 134、137 がともに検出された方はいませんでした。

また、平成 30 年度から引き続き、定期的に年二回行なっていた農業者の方々の測定が今年度も一回だけとなりました。【表 4】

【表 4】

年月	WBC 事業内容
令和元年 11 月	ゆうきの里東和ふるさと協議会第 13 回 WBC 測定

2. WBC 校正およびファントム・線源貸出事業

WBC のバックグラウンド校正および貸出等を下記のとおり 3 回行いました。【表 5】

【表 5】

年月	依頼先	作業内容
令和元年 8 月	那須町保健センター	WBC BG 校正
令和元年 10 月	NPO 法人いわき放射能市民測定室	WBC BG 校正
令和元年 10 月	NPO 法人ふくしま 30 年プロジェクト	WBC BG 校正

●ふくしまくらす交流会

平成 31 年・令和元年度での、ふくしまくらす交流会の開催は無しという結果になりました。事業計画では開催を計画していたのですが、中心となるスタッフが休職したことで企画から停滞し開催へといたることができませんでした。また、今後は COVID-19 の影響も鑑みていかなければならない状況で、開催の形態も含めて定期的な継続について判断しなければならぬと思われます。

●勉強会

これまで、勉強会の参加者人数は内容よりも、講師の知名度に左右される面が大きかったと思われます。そこで、合計7回開催した勉強会のうち4月に開催した2回は、『「図説」17都県放射能測定マップ＋読み解き集』の解説も行うことを告知し、放射能問題に関心のある方々への参加を募ることでの相乗効果を狙ってみましたが、目立った増加はなかったようです。

それとは反対に最も参加者が多かったのが、5月18日にNP0法人チェルノブイリ医療支援ネットワークと共催した、ベラルーシの甲状腺専門医3人による講演会でした。61名という参加者数は、近年に福島県内で開催したイベントのなかで最も多く、ベラルーシ現役の専門医の話の聞くことができるという特別感が市民の関心を引いたと思われます。ただし、この会も30～40代の参加者は少なく、60代以上が主だった年代でした。子育て世代の参加が振るわなかったことは、講演会の開催日が学校の運動会と重なったこともあります。甲状腺がんというテーマが保護者世代にとって、いずれにも優先する事案ではなくなった感があります。

令和2年1月に行った「東電廃炉資料館・コミュタン福島」見学バスツアーについては、平成30年から開始して2回目だったのですが前回よりも注目度が高く、定員20名を超えての申込みがありました。最終的に2名の方をお断りせざるを得なかったのですが、平成30年12月時は10名程度の参加者であったことと比較すると、今回は3.11から10年目を目前にしてというタイミングで関心の高まりがあったのかもしれません。

このなかで、東電廃炉資料館は原発災害の中心である第一原発に焦点を当てた施設であるため、参加者の関心はコミュタン福島よりも高かったようです。ただし、東電廃炉資料館については第一原発内のみの事象だけを追いかける施設であるため、立地する双葉町や大熊町を含めた動きが分からないことに不満を持つ参加者もいました。現時点では、第一原発の災害を知る施設は「点」の情報しか提供できておらず、それら点の情報をつないだうえで、さらに立体的に事象が捉えられるようなものはまだ無いようです。

3月には、福島県立博物館で開催された「震災遺産を考える」を見学する予定で募集告知も打ちましたが、COVID-19の影響をかんがみて中止としました。そして、ふくしまくらす交流会の項でも述べましたが、今後はCOVID-19の影響から、集客をしてのイベント開催は再考しなければならないでしょう。

勉強会には『JT NP0 応援プロジェクト』『「一食(いちじき)福島復興・被災者支援」事業』の助成金を活用させていただきました。



5 月 18 日開催 チェルノブイリ甲状腺専門医講演会の風景

【表 6】勉強会

	日にち	会場	内容	参加人数	備考
1	平成 31 年 4 月 21 日	いわき芸術文化交流館アリオス 中 リハーサル室	後藤忍准教授講演会 震災の記憶を未来 へ 記憶を記録とするために	7 名	講師：後藤忍さん
2	4 月 27 日	アクティブシニアセンター アオウゼ 大活動室 1	おしどりマコ・ケンと『放射能測定マップ+ 読み解き集』を知ろう！ in 福島市	30 名	講師：おしどりマコ・ケ ンさん
3	令和元年 5 月 18 日	チェンバおおまち 会議室	市民講座 チェルノブイリ甲状腺専門医講 演会「25 万件の検診をしてきた医師の 話」in 福島	61 名	講師：アルトゥール医師 ウラジーミル医師 マキシム医師 ※NPO 法人チェルノブイリ医療 支援ネットワークとの共催
4	6 月 15 日	チェンバおおまち 多目的ホール	市村高志さん講演会『復興 2019』 －誰のための「復興」？－	18 名	講師：市村高志さん
5	10 月 12 日	サンライフ福島 大研修室	市民講座 アンドレアス・シングラー氏講 演会 ドイツから学ぶ、再生可能エネルギ ーの未来と課題	16 名	講師：アンドレアス・シ ングラーさん
6	12 月 8 日	チェンバおおまち 会議室	2019 レクチャーシリーズ 清水奈名子准 教授『なぜ政府は被災者を積極的に守ら ないのか』	12 名	講師：清水奈名子さん
7	令和 2 年 1 月 11 日	東電廃炉資料館 コミュタン福島	原発事故アーカイブ施設「東電廃炉資料 館・コミュタン福島」見学バスツアー	21 名	講師：後藤忍さん

●福島県内の状況を伝える、研修・交流会

福島県に関心を持つ首都圏在住者、また、首都圏への自主避難者を対象に、福島県を取り巻く最新の状況や、放射能の測定データを伝える交流会を行いました。【表 7】

イベントは昨年に引き続き、専修大学の長谷川宏教授に協力してもらい大学内の教室を会場にしました。参加者は 48 名と、前回よりも 21 名ほど少ない結果となりましたが、Facebook で行った告知に対して、「COVID-19 の流行が始まるかもという時期なのだから、ネットで中継してほしい」との要望があったことを踏まえると、参加者の減少については多少なりとも COVID-19 の影響があったかもしれません。

二部構成のうち、前半では記録をテーマに島明美氏が伊達市に対して情報公開請求を行ない、ガラスバッジ問題を調査していった経緯について語ってもらいました。また、後半はシンポジウム形式で島明美氏や弊法人の佐原真紀を含めた 4 人の女性に登壇してもらったのですが、それについて偏った人選では?という意見もありました。こういった場になると 40 代の子育て世代の女性ばかりの話になるので、その他の男性や広範な年代の話を聞いてみたいというものだったのですが、これは主催者側からすると非常に難しい指摘だと感じました。

強制避難指示のあった地域の住民であれば、原発災害についての問題に男性が顔出して意見を述べることもあり、むしろメディアの取材を受けることは多い印象すらあります。しかし、避難指示のなかった地域に居住する男性の多くは、各々の地域の経済活動という社会に参加しています。その立場になると、「風評被害」という単語の問題ならば語り得ますが、このイベントのようなテーマでは求められていることに対して、語ることがないと思われるからです。しかし、別のテーマ立てであれば、強制避難指示のなかった地域の男性＝地域の経済に参加する人々について考えるということも福島県内の状況を伝えることになるかもしれません。

【表 7】 福島の現状を知り、語り、考える会

	日にち	会場	内容	参加人数	備考
1	令和 2 年 2 月 8 日	専修大学 7 号館 3 階 731 教室	「未来へつなげるために 今できること」	48 名	講師：島明美さん 高橋千春さん 中村奈保子さん



福島の現状を知り、語り、考える会の会場風景

「福島県内の状況を伝える、研修・交流会」は、『「一食(いちじき)福島復興・被災者支援」事業』の助成金を活用させていただきました。

●子ども向け放射線ワークショップ

平成 31 年・令和元年度は、子ども向け放射線ワークショップの開催にはいたりませんでした。事業計画には盛り込んだものの、前年度までの反響の無さを踏まえると根本的な打開策が浮かばず、最終的に開催を見送ることとしました。

●ホットスポットファインダー測定(空間線量マップ化)事業報告

平成 31 年・令和元年度は、ホットスポットファインダー測定を 10 件行ないました。

【表 8】【図 9】

そのなかで、富岡町での新たな町おこしのために移住した方からの測定依頼がありました。空間放射線量については、そこで検出された数値と共存していくということを踏まえた、福島第一原子力発電所から近い場所ならではの苦労があることが分かりました。

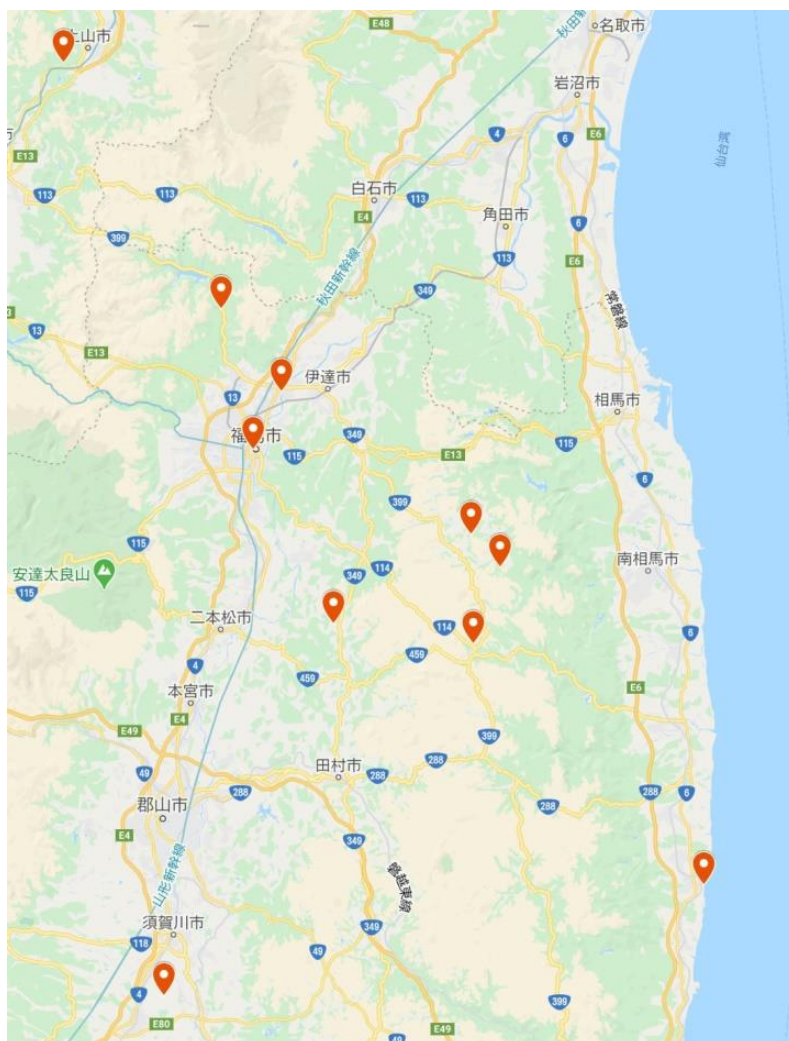
また、二本松市の東和小学校の測定を、保護者の方々や二本松市放射線アドバイザーチームの木村真三さんと一緒に行いました。東和小学校は以前にも測定はしていたのですが、今回のホットスポットファインダー測定で、定期的に空間放射線量を確認する取り組みに協力できたことは良かったと思います。放射線量については、一部アスファルトの切れ目などに高い所があり、その表面を少し削ってみるとさらに線量が上昇しました。放射性セシウムの汚染が土中にしみ込んでいるのが確認できたことが印象的でした。

食品・環境放射能測定の項で述べた「伊達市測定プロジェクト」ではホットスポットファインダー測定もあり、こちらも季節が冬となったため出足が低調であり、明けて春先となっても COVID-19 の影響から芳しくない進捗状況と言えます。

【表 8】ホットスポットファインダー依頼先分類

分類	測定件数
住民・保護者	4 件
支援団体	3 件
その他	3 件
合計	10 件

【図 9】 ホットスポットファインダー測定場所



「伊達市測定プロジェクト」は「『5』のつく日。JCB で復興支援」の助成金を活用させていただきました。

● みんなのデータサイト（市民放射能測定データサイト）

<https://minnanods.net/>

参加測定室 全国 30 の放射能測定室

食品・環境データ数 18,332 件（弊法人登録データ数 3,764 件）

令和 2 年 3 月 31 日現在

土壌データ数 3,443 件（弊法人登録データ数 357 件） 令和 2 年 3 月 31 日現在

高濃度土壌データ数 107 件（弊法人登録データ数 0 件） 令和 2 年 3 月 31 日現在

弊法人は、市民による放射能測定のデータの共有や連携を目指して立ち上げた『みんなのデータサイト』に、幹事団体の一つとして参加しています。

平成 31 年・令和元年度は、前年度に発売した『「図説」17 都県 放射能測定マップ＋読み解き集(以下、マップ集)』の読み説き会を全国で開催することを進めました。このマップ集は、できるだけ平易で分かりやすい内容を目指して編集しましたが、ただでさえ特異なテーマとなる放射能について、実際に読み解き方講座を行なわないと理解が深まらないだろうということが理由です。今年度はマップ集の持つ潜在的な力を宝の持ち腐れとしないためにも、この事業を精力的に進めました。ただし、ここでも COVID-19 の影響は大きく、2 月以降に予定されていた読み説き会は軒並み中止、または延期となりました。

もう一つの大きな事業としては、英語版のダイジェストマップ集の制作があります【図 10】。これは海外からの、第一原発が収束していないにも関わらず 2020 東京オリンピック開催に対しての疑念に応えるために企画されました。短期間に 200 ページもある日本語版を全て英訳するのは不可能なので、土壌マップ部分に焦点を絞り、3.11 前の 2010 年土壌データ(国の公開データ)マップや、2020 年 7 月のオリンピック開催時に減衰補正した測定値の土壌マップなどを追加して発行しました。表紙を除くと 16 ページという、まさにダイジェストという内容でしたが、海外に向けて発信するにあたっての基盤となるブックレットができたと思います。ただし、翻訳作業の難しさや大変さも分かったことで、続刊は未定となっていました。

また、発売が令和 2 年 4 月になったため、年度をまたいでの事業となったのがマップ集の増補版制作です【図 11】。こちらは 32 ページの追加を行ない、英語版にあった 2010 年、2020 年マップの追加や、小児甲状腺がんを最新の情報にアップデートしました。増補版の発売で、旧版からの累計発行部数が 2 万部を超えることになりました。

そして、みんなのデータサイト全体の測定事業としては、「2019 全国たけのこ無料測定キャンペーン」「台風 19 号水害被災地 土壌放射能調査」を参加測定室で進めました。ただ、これらは一般の市民にも検体を提供してもらうつもりで募集をしたのですが、その反

市民参加型独立データベース
みんなのデータサイト

CITIZENS' RADIATION DATA MAP OF JAPAN

DIGEST EDITION

Grassroots Movement Reveals Soil Contamination in Eastern Japan in the Wake of Fukushima!

3.11 2011

3 YEARS 4,000 PEOPLE 3,400 SOIL SAMPLES

FUKUSHIMA Daiichi Nuclear Power Plant



●子どもの自然体験と交流事業

令和元年度も平成 28 年度から継続し、山形県にある「大江町山里交流館やまさあーべ」の協力のもと、田植え・稲刈りと雪遊びなどの農業・自然体験を行ないました。【表 12】

震災後、外遊びや農業体験をする機会が減った子どもたちに、田植え、稲刈りなどの米作りの苦労を知ってもらうことで、食の大切さを感じてもらうことができる体験になりました。初夏の田植えキャンプでは、林の中の土中の生き物観察を行いました。子どもたちは、土の中の小さな生き物を真剣に探していました。秋の稲刈りについても今年で 4 年目なので、稲を刈ったり束ねたり、そして運んだりという一連の作業を段取り良く行うことができるようになりました。

また、稲作の農業体験以外にはブッシュクラフト※体験を行いました。仮テントを立てたり、火をおこしたり、そして、飯ごう炊飯を行いました。ロープの結び方や、慣れない薪での火おこしは大変苦勞していたようですが、貴重な体験になったと思います。

今年度は新たに雪遊びを企画していたのですが、今年は記録的に雪が少なく、残念ながら、初めに計画していたかまくら作りはできませんでした。その代わりとして、凍み餅作りとピザ作りを行いました。ピザ作りでは、雪の中から山菜や野菜を収穫して、ワイワイ言いながらの楽しいひと時となりました。

※ ブッシュクラフトとは、森林等の自然環境の中における『生活の知恵』の総称とされており、その行為や技術をそう呼ぶ。(Wikipedia より)。

子どもの自然体験と交流事業には、『『5』のつく日。JCB で復興支援』の寄附金を活用させていただきました。



田植え風景



土中の生物観察



稲刈り風景



ブッシュクラフト体験



凍み餅の前で



ピザ作り

【表 12】 子どもの自然体験・交流事業

日にち	場所	参加人数 (スタッフ含む)	主な活動内容
6月1日 ～ 2日	山形県大江町	24名	田植え、土の中の生き物観察
10月5日 ～ 6日	山形県大江町	17名	稲刈り、ブッシュクラフト
2月1日 ～ 2日	山形県大江町	19名	凍み餅作り、ピザ作り

●冊子・通信発行

- ◆「ふくしま 30 年プロジェクト通信」 発行 1 回
(Vol. 39 300 部)

◆記録誌発行事業

「山の端の向こうから What happened in Fukushima」
(1,000 部)

弊法人がこれまで継続してきた市民視点での放射能測定と、この活動に携わった関係者や利用者の記憶・経験を記録に残すことで、市民による原発事故風化を防ぐための放射能測定活動・証言記録誌を作成するということで制作しました【図 13】。

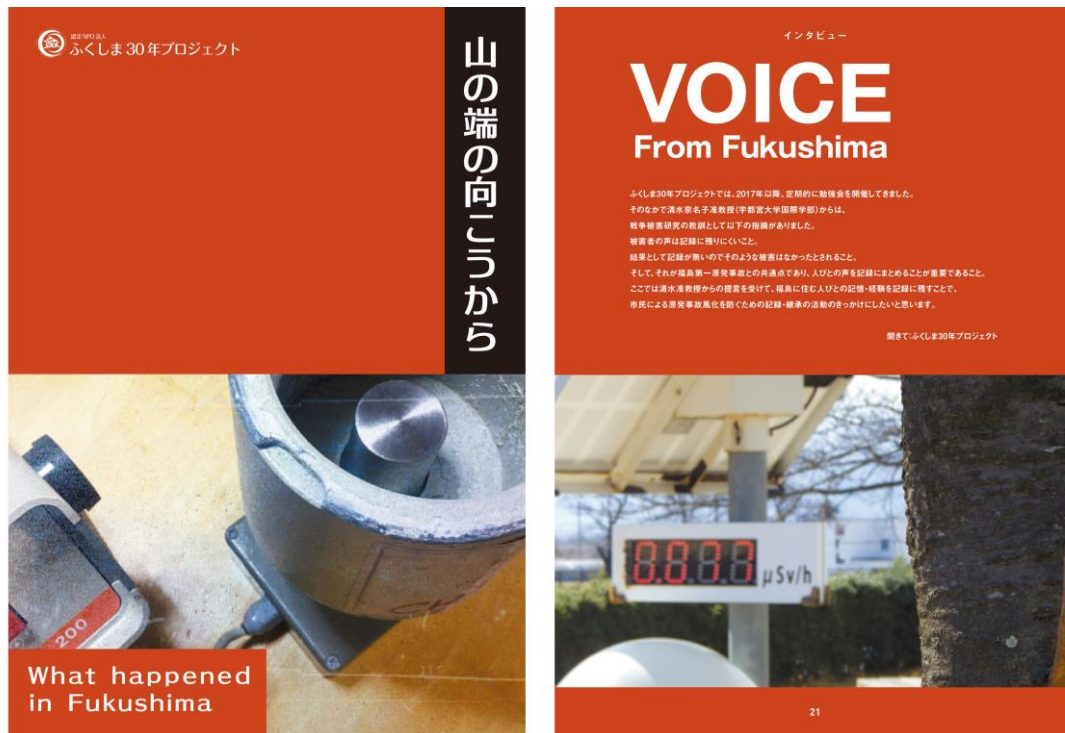
記録誌を作成するにあたり、あらためて 8 年前の報道や自治体の広報資料などを確認しました。それは、今回複数の方々にインタビューをするための下調べや執筆にあたって必要な資料を揃えるためだったのですが、私たちが放射能測定活動を開始するきっかけ、いわゆる初心の再確認にもなりました。

インタビューを受けてくれた 7 名の方々（農家、避難者、支援者など）の話も非常に中身が濃い内容で、東電福島第一原発事故がそれぞれの人生に与えた衝撃の大きさを感ずることができました。また農家の方は、日ごろの農業の記録と合わせてふくしま 30 年プロジェクトの行った放射能測定の記録も保管していて、その点で私たちの活動との接点が大きかったことが分かりました。

とは言っても、私たちの団体が記録に残せる範囲は大勢の中の一部にしか過ぎません。しかし、それら市井の人々の記憶を記録することの大事さを、今回の記録誌作成のプロセスのなかで感ずることができました。

記録誌作成及び発送には『「しんきんの絆」復興応援プロジェクト』『「一食(いちじき)福島復興・被災者支援」事業』の助成金を活用させていただきました。

【図 13】「山の端の向こうから What happened in Fukushima」



What happened in Fukushima

INTERVIEW | 阿部一子

どうしても測りたい

阿部 原発事故直後の5月29日、チェンソーでおまち[※]で、食品の測定をしてくれるという企画がありました。13時から食品の測定をしてもらうことだったので、午前中に畑へ行き、サクラがどの大きさになったか梨の実を1kg採って出かけてきました。

13時前に会場に着いたのですが、すでにたくさんの方が集んでいて、僕の人数を数えていて、私の2、3人前に来たところで、「ここで終わりです」と言われ果然としました。「どうしても測ってもらいたい」とその思いは強く、キャベツがゴロゴロ入っている、「同じ種類のキャベツを測っても同じくらいか」というので、一つ梨に入れて替えてもらえないですか？というお願いをしたら、「いいですよ」ということで、最後の一つで測ってもらえました。その時測ってもらった梨の実が200 Bq/kg、それを採った梨畑の空間線量は1.48 μSv/hとノートに書いてあります。

一当時の機器は「LB200」という、セシウムとカリウムを一緒に測定するものでしたので、それを分離して計算していたのか、そこは不透明です。

阿部 私はインターネットとかやっていないので、結果は電話でも何でも「直接欲しい」と言っただけです。でも連絡がなくて、後日機会があって聞いたら、その時に「阿部さんのところは確か200 (Bq/kg) 超えた」という本当にいい加減な情報でした。

一当時はかなり混乱していた背景もあるかと思いますが、

阿部 確かに、人はごった返して、測ってる方が「受付は終わりました」って誤解しようとしても、泣きついて「何とかならう」と言ってる人もいました。その中の一人が私でした。あの時は本当に、「どうしても測りたい」という人が多かったんです。

福島での測定はまだ機能していない、梨はだんだん大きくなり、じゃあ「これを出荷していいの？」という時に、測定所を紹介いただきました。理研分析センターというのが山形、鶴岡市にあって、1棟12,600円でした。

ゲルマニウム半導体検出器での測定でした。でも、個人向けには「10 Bq/kg 以下は不検出」という結果の出し方に納得がいなくて、もう少し「ちゃん」と測れるところはないか？と探して、初年度はそれで終わってしまいました。

一同年9月から、CRMS市民放射線測定所[※]で、セシウムとカリウムを分けての測定が始まりました。

阿部 8月6日に「夏のお便りを書きたいので、どれくらい放射線が入っているかを知りたい」ということで、それでその結果をもって「ウチの梨にはこれだけの放射性セシウムが入っています、もしそれでも食べていただけるのならお送りします。いかがでしょうか？」というお便りを、全国に800通くらい出しました。「それでもよければ、注文してください」と。

8月6日の段階で20~28 Bq/kg 出ています。その次の8月30日の測定の時で9.62~13 Bq/kg になっていました。とにかくウチでは毎年そういうかたちで、皆さんに「現状はこうです」ということをお伝えし続けてきました。

私は1986年の2月に娘が生まれています。だからチェルノブイリで事故が起きた[※]4月26日というのは、生後2ヶ月くらいの娘を抱っこしながら、その影響で母乳にセシウムが含まれているという話を聞いて、当時私も「飲ませない方がいいんじゃないか？」ということこそすこい悩んでいました。答えを覆して、どこに送り届けたいのかわからなかったんです。当時はもちろん、ネットもない時代です。だから私としては、とりあえず子どももがいたり、物を食べる人にとっては「キチンとした情報は提供しよう」と思って、そういうお便りを書いてきました。

一800通の反応はいかがでしたか？

阿部 すごく好意的でした。しかもそのお便りが皆さんの手から手へまわって、いって、「もしよかったらあなたも一緒に？」みたいな、「風評被害ってあるみたいなんだけど、今回あなたも一緒に買ってみない？」という感じで。それで、事故後の出荷一発目から売り上げが落ちるということはありませんでした。

阿部農園

阿部 一子

あべ いちこ
1964年東京府足立区生まれ。元足立女子大学教員。現在は福島県山形市に在住。福島県産品の販売・生産者として活動中。福島県産品の販売・生産者として活動中。福島県産品の販売・生産者として活動中。

●講演等

令和元年

- 5月15日(水) 「放射能測定マップを読み解く」をテーマに、第19回子ども脱被ばく裁判の学習会として開催 主催：「子ども脱被ばく裁判」の会 (清水)
- 7月14日(日) 「マップ集読み解き講座」 主催：山形生活クラブ協同組合 (清水)

●書籍・物品販売・測定器レンタル事業

書籍販売売上 100,279 円、物品販売売上 80,700 円、賃貸収入 25,000 円

測定器レンタル利用者数 のべ4人

●会員数

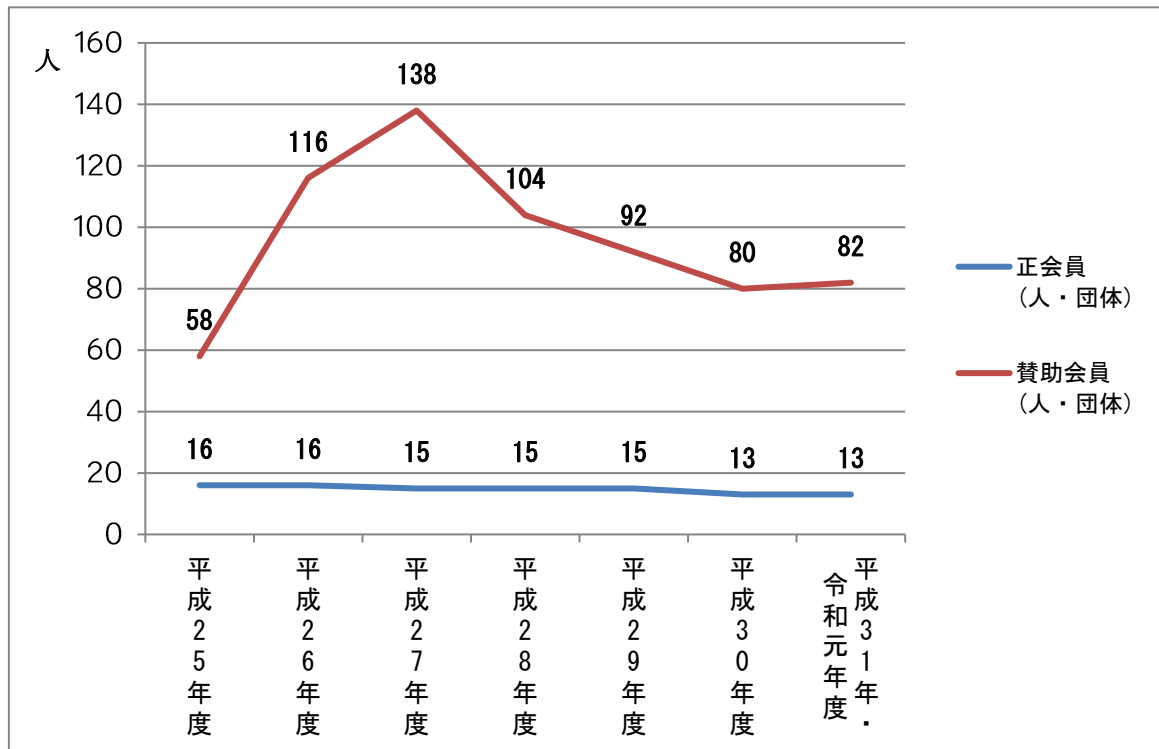
令和元年度末の時点で正会員は13名と前年度から変化はありません。また、賛助会員については82名となり、80名から2名の増加となっています【表14・同グラフ】。

賛助会員についての増加は、若干数ではありますが平成27年度以来のことです。新規の会員となった方々が引き続き応援を継続していただけるよう、団体としての魅力をどうやって表現していくか。年度末にかけてのCOVID-19の影響は、私たちにとって新たな第一原発事故のようであり、再び世界が変わる瞬間に立ち会っていると思われます。このような時代に、会員の方々にどのような姿勢を見せなければいけないか？次年度は、団体としても10年目を迎えるところで、節目の年となるかもしれません。

【表14】会員数推移

年度	正会員 (人・団体)	賛助会員 (人・団体)
平成25年度	16	58
平成26年度	16	116
平成27年度	15	138
平成28年度	15	104
平成29年度	15	92
平成30年度	13	80
平成31年・ 令和元年度	13	82

【同グラフ】 会員数推移



●寄附

認定 NPO 法人の認定基準のうち「絶対値基準」の要件をクリアするため、新たに「絶対値基準」を満たす 3 千円超の金額を継続的に寄附するサポーター枠を新設することとしましたが、サイトにページを作成する作業が滞っています。それにともない、告知展開もできませんでした。

前回の総会でサポーター枠の新設を決めながら実際には展開できなかったのですが、テストタイプとして 12 月に 1 ヶ月間の寄附キャンペーンを行ない、のべ 23 人の方々から計 298,979 円の寄附をいただくことができました。これはキャンペーンという特別の期間を設けたかたちなので、毎月支援するサポーター枠とは直接の比較はできませんが、アクションを起こすことによって反応があることだけは確認できました。

次年度に持ち越すことになりましたが、サポーター枠の整備を進め、「絶対値基準」の要件をクリアできる体制を目指します。